教授の呟き

第1回

たぬきうどんと二つの物流

同じ言葉に2つの意味

地方に出かけたとき、理解できない方言を耳にすることがある。こんなときには意味を訊ねれば事は足りる。しかしこれよりも困ることは、同じ言葉でも意味が異なる場合である。例えば、蕎麦屋に入ったとしてみよう。関西の「きつね」は「油揚げののったうどん」で、「たぬき」は「油揚げののった蕎麦」である。しかし関東の「たぬき」は、「天かすののったうどん、または蕎麦」となる。

このように同じ言葉でも意味が異なると、話す人と聞く人、書く人と読む人の間で、知らぬ間に誤解が生じることになる。

学生時代から、どことなく釈然としなかった言葉の一つに「物流」があった。この感覚がどこから来ているものか当時はよくわからなかったが、今から16年ほど前に研究生活を再開し、しばらくしてから「同じ言葉なのに、別の意味がある」と気がついた。

それが、「2つの物流」である。

ご存知のように、「物流」は「物的流通」の略語というのが一般的な理解だろう。岡田清先生（成城大学）によれば、昭和33年に宇野政雄先生（当時、早稲田大学）を団長とする調査団がアメリカに出かけて、Physical Distributionという用語を日本に持ち込み、これを「物的流通」と訳したことに始まるとされている。そして、昭和30年代後半には、「物流」が専門用語として定着するようになった。この「物的流通」にもとづく「物流」には、輸送、保管、流通加工、包装、荷役などが含まれている。

ところが似た言葉に「物資流動」（Freight Transportation）があり、厄介なことに、この言葉も略すと「物流」になってしまう。そして筆者のように交通計画や都市計画を大学で学んだ者にとって、「物流」の第一義は「物資流動」になりがちなのである。「人の交通」に対比される「物の交通」という理解であるから、輸送機能のみに着目しており、保管や在庫などはほとんど気にしない。そもそも人に保管や流通加工や包装などないのだから、人の交通を中心に交通計画を学べば、輸送以外の機能に考えが及ばないことも致し方ない。

2つの物流は理解しても疲れる

そんなことを思い巡らした末に達した結論が、「2つの物流」である。同じ「物流」という専門用語でも、使う人によって意味する範囲と内容が大分異なると判明して、ようやく納得できた次第である。

しかし先の蕎麦屋の例に従えば、「たぬき」と注文しても「油揚げが出てくるか、天かすか」と、不安と期待が交錯する気分は残る。「狐と狸の化かし合い」と言ったら、冗談が過ぎるだろうか。ならば東西の中間にいるときには、「この蕎麦屋は、関東系か関西系か」と予想すればよい。そうすれば、出てくるドンブリの中身も想像できる。

そこで、商学・経済学出身の人と話すときには「物的流通」、工学出身の人と話すときには「物資流動」と考えて、同じ「物流」でも頭を切り換えるようにした。これによって、ようやく無難に過ごせるようになったものの、やはり疲れる。なにも「2つの物流を理解している」などと、有頂天になるつもりはない。むしろ使い分けることや切り換えることに、くたびれてしまうからである。

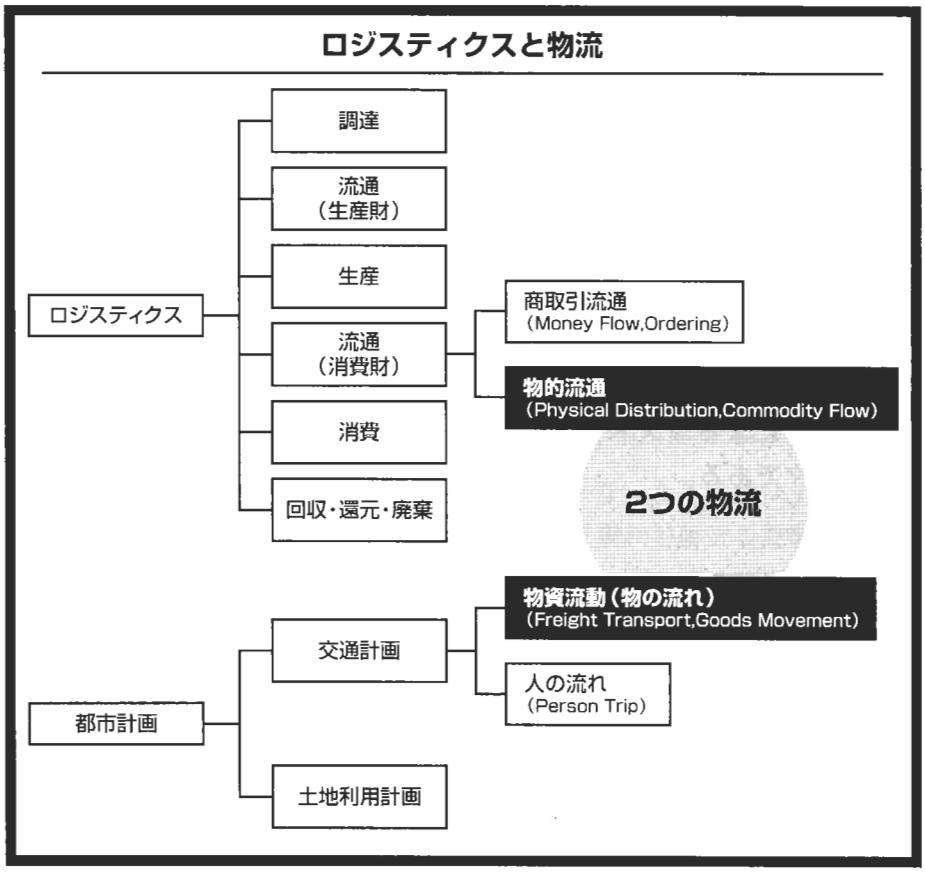
物流からロジスティクスへ

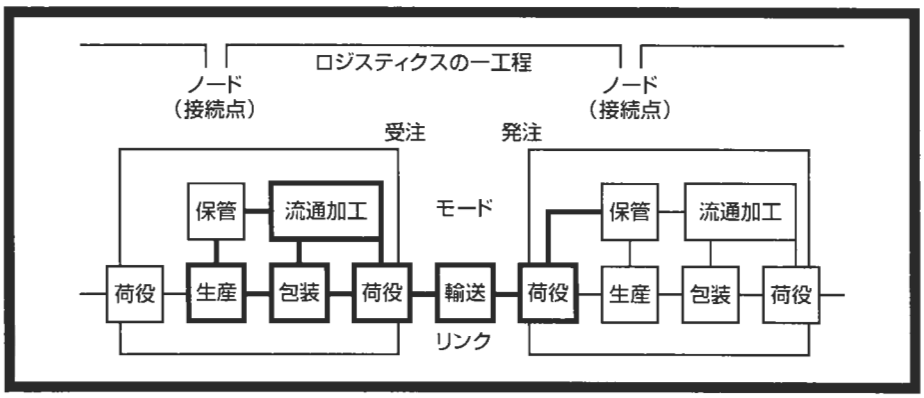
近年、物流に代わってロジスティクスという言葉が普及するようになり、少しは助かるようになった。「ロジスティクスの定義は、研究者の数プラス1だけある。だって、私は2つの定義を使い分けているから」と自嘲気味に皮肉を言う研究仲間もいるが、とは言っても、2つの物流よりはだいぶましである。

なぜならロジスティクスを考えるときに、生産や在庫や流通加工を考えないわけにはいかないので、数多くの定義も結局は似たり寄ったりで、考える範囲も近いからである。

もう少しすれば、物流よりもロジスティクスのほうが、一般的な用語として浸透する可能性もあるだろう。そうすれば、「物流」をめぐる混乱も少なくなるに違いない。

「物流」の使い分けも、あとちょっとの辛抱と言い聞かせながら、その時を待っている。





東京商船大学　流通情報工学過程
流通管理工学講座　教授
苫瀬博仁

（くせ　ひろひと）1973年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。75年、同大学大学院修士課程修了。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年から東京商船大学助教授、94年より同大学教授。1年間フィリピン大学客員教授を務め、現在に至る。